未熟児の輸送と死亡率

研究協力者：（国立岡山病院小児医療センター）
山内逸郎
協力研究者：　五十嵐郁子

院外出生で遠隔地から輸送された未熟児で死亡率が高くなるかどうかを調査してみた。対象は昭和５０年と５１年に当院未熟児施設で取扱った４４１例の未熟児である。

院内出生児と院外出生児とで死亡率を比較した。院内出生児では１１７例中，死亡５例で死亡率4.3％。院外出生児では３２４例中，死亡１９例で死亡率5.9％であった。この差は統計学的に有意ではない。

院外で出生したもののうち，岡山市内の病医院で出生し，当院に輸送された１５３例では，１４例が死亡しており，死亡率9.2％であった。岡山市以外の病医院で出生し，１時間以内の輸送時間で輸送された未熟児は１０８例で，死亡率は２例で，死亡率1.9％であった。また輸送時間１時間以上２時間までの比較的遠隔地から輸送されたものは６３例で，死亡例は３例で，死亡率は4.8％であった。

輸送中の死亡例はない。死亡例は１週以内の死亡である。輸送が直接の原因となったと考へられる死亡例はなかった。

この調査からでは，輸送距離と死亡率とは関係がないと考へられた。

未熟網膜症予防の方策について

研究協力者：
（関西医科大学）松村忠樹

Retrolental fibroplasia（RIF, Terry 1942）

またはRetinopathy of prematurity（Heath 1951）といわれる疾患は，その発生機序，病型分類あるいは予防，治療などについて未解決の点が今なお少くない。本症の重症例は失明という重大な結果をきたすためにわが国では，社会的問題にまで発展していることは周知のところである。

最近わが国では，未熟児の網膜検査が広く行われるようになり，本症の発生頻度は高くなっている。例えば軽症を含めれば，1,０００g以下の出生体重児では１００％に近い発生が認められている。

本症の発生を完全に防止することは不可能であるが，重症化を防ぎ重大な視力障害を遺さぬよう

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

院外出生で遠隔地から輸送された未熟児で死亡率が高くなるかどうかを調査してみた。対象は昭和 50 年と 51 年に当院未熟児施設で取扱った 441 例の未熟児である。

院内出生児と院外出生児とで死亡率を比較した。院内出生児では 117 例中,死亡 5 例で死亡率 4.3%。院外出生児では 324 例中,死亡 19 例で死亡率 5.9%であった。この差は統計学的に有意ではない。